

編輯後記

何時ものこと乍ら原稿の應募が低調であつた。表現すべき内容と能力はあるがたゞ表現しないのか。それとも表現すべき内容も能力もないのか。殊に社會思想に關する論文が全然見られなかつたことは其自身が社會意識欠如の發徴ではないにしても一面龍南の傾向を見せてゐると思ふ。恐らしいものとしては「鐵道實習に關する肥後」が一篇見られたが單に作文的な内容であるので割愛した。

文藝方面では短歌の應募皆無、詩も多くはなく稿本君のみが多數提出してくれた。けれど龍南會中比較的活潑である文藝部の存在は新しい意慾を期待してよからう。小さな完成を試みるよりは可能性を問題としたい。

尙校長先生は多忙の爲に御高朗を賜はることは出来ませんでしたし

たが幸にして高森教授の熱心な御寄稿を得たことを紙上を借りて感謝します。

作品の鑿術に當つては松本教授、田崎教授の御指導を仰ぎ殊に田崎教授よりは日本では全く未知の新しい領域、サモセット・モームの作品を投稿して戴く筈であつたが手續の關係上、やむなく取止めることとした。兩教授に深く感謝します。

最後の日誌抄はその編を總務部に託したが此又種々の事情から着手されず、寮史部資料(昭和十三年度より終職まで)により抜抄甚だ体装を缺く結果となつたがこの點に關しては編輯に當つた委員一同慙愧に堪へません。

とまれ、種々の悪條件にも拘らず目的の幾分かをでも果し校友に本誌を送ることが出来るのは委員一同のよろこびであり、さ、やか乍ら六十周年を記念する一つの石を置き得て委員一同の勞漸く擲らはれたかの感である。

編輯委員

隅田	高見	小宮	深堀
哲司	正明	幸善	光弘